

令和 3 年 6 月 2 日現在

機関番号：17701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13551

研究課題名（和文）人格的結合から見た前漢皇帝支配体制の展開

研究課題名（英文）Research on the development of the Emperor's rule system in the Former Han dynasty, focusing on personality bond

研究代表者

福永 善隆（FUKUNAGA, Yoshitaka）

鹿児島大学・法文教育学域法文学系・准教授

研究者番号：00581539

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、前漢における皇帝支配を支える「人格的結合」の変化を通して皇帝支配体制の展開を解明しようとするものである。その成果は主に以下の三点である。1）前漢前半期において、劉邦集団の子弟たちが優先的に任官した郎官の性格、及びその官とその集団が再生産されていくメカニズムとの関係、2）劉邦集団の内部構造とその前漢前半期の国家体制との関係、3）人材登用制度としての察掾の形成と劉邦集団との関係である。以上の成果はそれぞれすでに論文として公開されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中国において、秦の始皇帝以来、2000年にわたり存続した皇帝支配体制は中国社会の特質と密接に関連していると考えられている。その皇帝支配体制が整備され、定着されていく上で、漢の国家構造は大きな影響を与えている。漢の国家構造は「人格的結合国家」として捉えられることもあるが、本研究はその点に着目し、漢一代における皇帝支配体制の展開について、その「人格的結合」の展開を通して、新たな、一貫した視点から描き出そうとする試みの起点となるものである。さらに、「人格的結合」を中心としてその国家体制を追究することは、「人治社会」とされる中国社会の特質にもつながる視点を得られる可能性があるものである。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research is to elucidate the development of the emperor's rule system, through the analysis of changes in the "personality bond" that underpins emperor rule in the former Han dynasty. The result is mainly the following three points, 1) the character of attendant in the inner palace, the official positions appointed preferentially by the Liubang group, and the relationship between the situation and the mechanism by which the Liubang group is reproduced, 2) the relationship between the internal structure of the Liubang group and the state system in the first half of the former Han dynasty, 3) the relationship between the formation of a system for recruiting human resources "Chaju" and the Liubang Group. Each of the above results has already been published as a thesis.

研究分野：中国古代政治・制度史

キーワード：前漢 人格的結合 任侠的結合 劉邦集団 官僚機構

1. 研究開始当初の背景

周知のように、秦漢時代は始皇帝がはじめて、皇帝と称して以降、2000年にも及ぶ皇帝支配体制が創始され、確立されていった時代である。

近年、秦漢史研究では張家山漢簡など、出土史料の増加により、文書伝達のシステムや法制など、皇帝支配を支える制度の枠組みが明らかとされ、その歴史像は変わりつつあるが、その多くの研究が利用する睡虎地秦簡・里耶秦簡・張家山漢簡などはいずれも秦・前漢前半期の史料であり、前漢後半期に関するまとまった出土史料は辺境の防衛に関するものに限られているため、その研究は主に伝世文献を用いた制度史研究あるいは祭祀をはじめとする礼制研究が盛んに行われている。このように、前漢前半期・後半期に関する研究はそれぞれ一定の成果をあげているものの、その方法論・研究対象の乖離が拡大してきており、それに伴い、前漢一代を通じて、一貫した観点から皇帝支配体制の展開を描き出す試みは難しくなっている。

この秦漢期の国家について、渡辺信一郎氏は「官府による百姓支配から見ても、国家機構内部の社会関係から見ても、人格的支配と人格的結合を基礎とする人格的結合国家である」と論じている（渡辺信一郎『中国古代国家の思想構造—専制国家とイデオロギー—』、校倉書房、一九九四年、三四五頁）。この氏の見解にみられるように、皇帝支配体制を支えるさまざまな制度は皇帝と官僚の間、官僚の間、官僚と民衆の間など、さまざまな「人格的結合」が基盤となっていたと考えられる。

渡辺氏は上のような「人格的結合」として、「任侠的關係」に注目するが、この「任侠的關係」にはじめて着目したのは増淵龍夫氏である（増淵龍夫「漢代における国家秩序の構造と官僚」、『新版中国古代の社会と国家』、岩波書店、一九九六年所収）。すなわち、氏はこの「任侠的關係」が前漢前半期において、皇帝の官僚に対する一方的権力関係を内面から支えていたが、武帝期以降、それまでとは異なった形で、すなわち官僚相互が党与を形成する際に機能し、かえって皇帝の官僚に対する一方的権力関係を阻害する要因として機能するようになったと指摘された。さらに、東晋次氏は、武帝期以降、儒学が浸透するのに伴い、「任侠的心性と儒家的教養とが接合」し、「国政機関の長としての皇帝に対する官僚層の忠節観念、という新たな君臣関係意識へと編み変えられていった」と指摘される（東晋次「漢代任侠論ノート（二）」、『三重大学教育学部研究紀要（人文・社会科学）』五二、二〇〇一年）。

上の先学諸氏の見解をあわせ考えると、秦漢期の「人格的結合」のあり方には変遷が見られることになるが、漢王朝が「人格的結合国家」であるとすれば、その変遷を通して皇帝支配体制の展開を描き出すことができるであろう。

このような視点に立ったとき、前漢の皇帝支配体制の形成・展開と関連して着目されるのが、前漢の初代皇帝高祖劉邦につき従い、漢王朝を打ち立てた創業の功臣たちによって構成される劉邦集団である。上述した増淵龍夫氏の研究では、「任侠的關係」を分析する際、この劉邦集団を中心として論じられている。ただし、劉邦集団は前漢第七代皇帝武帝の末年まで、世代を超えて約100年存続したとされているものの、そのなかで彼らの集団としての結合がどのように継承され、維持されていたのか、という点はいまだ十分に明らかになっていない。また、この劉邦集団については李開元氏により、皇帝と劉邦集団との相克により、前漢前半期の政治史の展開が詳細に描き出されているものの（李開元『漢帝国の成立と劉邦集団』、汲古書院、二〇〇〇年）、その対象は劉邦集団が消滅したとされる武帝末年までに限られており、それが前漢後半期にどのようにつながり、展開していくのか、という点は十分に論じられているわけではない。

本研究はこのような問題意識に基づき、「人格的結合」の変容とその影響から前漢の国家体制の変容・皇帝支配体制の展開を追究しようとするものである。

2. 研究の目的

本研究は皇帝と官僚との間の「人格的結合」に着目し、その具体的な様相及びそれがどのように形成され、引き継がれ、そして、変容していくのか、政治史・制度史の成果を踏まえながら追究し、もって、前漢一代における皇帝支配体制の展開を一貫した観点から論じるための基礎としようとするものである。

3. 研究の方法

「1. 研究開始当初の背景」で述べたように、皇帝支配体制を支える「人格的結合」としての「任侠的關係」が最も特徴的にあらわれているのが、高祖劉邦に從い、漢王朝を打ち立てた創業の功臣たちによって構成される劉邦集団である。李開元氏は、彼らが漢王朝成立後、中央・地方の高官を独占し、皇帝を掣肘するほどの勢力を有する特権階層を形成したとされている（李開元『漢帝国の成立と劉邦集団』、汲古書院、二〇〇〇年）。李氏は、軍功受益階層は武帝末年まで存

続したとされているが、世代を超えて百年近くも一つの集団として存続し、機能していくためには、その集団内部のつながり・構造がどのような形で維持され、また、再生産されていったのか、追究しなければならない。

さらに、高祖劉邦と劉邦集団との間で結ばれた「任侠的關係」については、増淵龍夫氏の研究があるが（増淵龍夫「漢代における国家秩序の構造と官僚」、『新版中国古代の社会と国家』、岩波書店、一九九六年）、李・増淵両氏の見解はともに劉邦に従軍した功臣たちを分析の出発点とはしているものの、その対象は完全に一致しているわけではない。すなわち、増淵氏は「創業の功臣のごとく高祖個人とパーソナルな関係を持たない者であっても、かれらと生活感情を同じくする官僚」が官界に広範に存在したとするが（便宜的に「任侠的官僚層」と称する）、そこで挙げられる張釈之・袁盎などは李氏が設定した軍功受益階層には含まれていない。増淵氏は彼らを劉邦集団と協同して高祖以来、創業の功臣たちが作り上げた体制を維持しようとする勢力として捉えるのに対し、李氏は軍功受益階層以外の官僚の官界新出を軍功受益階層衰退の原因として捉えており、両者の見解はつきつめていくと齟齬する可能性がある。

このような状況は劉邦集団と「任侠的官僚層」との関係が十分に論じられていない点から生じる問題であると考えられる。

以上のような問題意識に基づき、以下三点の方法を通して、研究を進めた。

- (1) 劉邦集団が世代を超えて再生産され、その「人格的結合」を維持していくメカニズム
- (2) 劉邦集団の内部構造と前漢国家体制との関係
- (3) 「任侠的官僚層」と劉邦集団との関係

4. 研究成果

(2017年度)

2017年度は本研究課題と関わる成果として、2017年7月22日（土）に鹿児島大学において行われた第64回鹿大史学会大会にて、「前漢前半期における劉邦集団と人事制度の展開」と題する報告を行った。本報告は劉邦集団における人格的結合が世代をこえてどのように再生産されていったのかという点を問題にし、前漢前半期の人事制度において大きな役割を果たす郎官と察挙が劉邦と劉邦集団との関係を再確認し、その人格的結合を再生産する装置として機能していたことを述べた。本報告の一部は2018年3月に刊行された『鹿大史学』第64・65号に、「前漢前半期、劉邦集団における人格的結合の形成」と題する論考として上梓した。本論考は郎官が劉邦集団における人格的結合を再生産する装置として重要な位置づけを担っていたことを中心として分析した。具体的には、劉邦集団が郎官として優先的に、「高祖の衣冠」が月に一回高廟に「出游」する「游衣冠」の祭祀を通じて、高廟と直接つながる空間としての宮中への宿衛が認められることは、自身と「高皇帝」との関係を再確認することで、自身を劉邦集団のなかに位置づけ、その連帯性を再生産することにつながったと結論づけた。

また、2017年8月に中華人民共和国北京大学において行われた第十届中国中古史青年学者聯誼会に出席し、黄楨氏（四川大学歴史学院）の「官制撰述在漢末の興起」と題する報告に対して、官僚機構の構造に関わる理念・法制などに関する視点から議論を行った。

(2018年度)

2018年度は本研究課題と関わる成果として、2018年4月21日（土）に福岡大学において行われた第64回東洋史学研究会にて、「前漢劉邦集団の人的結合と郎官」と題する報告を行った。本報告は郎官と察挙が劉邦と劉邦集団との関係を再確認し、その人格的結合を再生産する装置として機能していたことを明らかとした前年度の成果を踏まえて、それが劉邦集団が拡大していくなかで外部の人間をその集団に取り込んでいく過程と関連する見通しを示した。

また、2019年3月に刊行された『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』第86号に、「漢初、劉邦集団の展開と構造」と題する論考を上梓した。本論考は『史記』巻18高祖功臣侯者年表などにみえる高祖功臣位次について、劉邦集団内部の評価が反映されたものとして捉え、そこから劉邦集団の内部構造がその成長過程と密接に関連するものであることを明らかにした。そして、劉邦集団は一つの集団として強い求心性と表裏一体の排他性を有する一方で、その外部の者を「天下を共にする」体制の担い手としてその外延に加えていく開放性も有していると結論づけた。

さらに、2019年3月に刊行された『名古屋大学東洋史研究報告』第四三号では「柴田昇著『漢帝国成立前史—秦末反乱と楚漢戦争—』」と題する書評を発表した。この前漢成立に関する柴田氏の著書に対する書評のなかで本研究の課題である劉邦集団との関係の視点から今後解明すべき点について私見を述べた。

(2019年度)

2019年度の本研究と関わる研究成果として、2019年度九州史学会大会東洋史部会（2019年12月15日、於九州大学）・中国古代史像再構築のための基礎的研究班第2回研究会（2020年2月15日、於京都大学人文科学研究所）において、それぞれ「前漢前半期における察挙の性格—劉邦集団の人格的結合形成の観点から—」・「前漢前半期における劉邦集団と察挙」と題する報告を

行った。

この二回の報告は、前漢前半期の官僚機構に広範に見られる、前漢創業の功臣のように高祖劉邦と直接パーソナルな関係を持たないが、高祖劉邦を権威とする「任侠的官僚層」がどのように形成されていくのかという点について、前年度彼らが劉邦集団と関係を取り結び、取り込まれていく過程と関連するとの見通しを得た、察挙の構造について具体的に追究したものである。周知のように、察挙は「公卿」が「士」を「大夫」に推薦するという形式を通して人材を登用する制度であるが、当該期における「士」・「大夫」という呼称を追究すると、そこに劉邦集団に外部の人材を加えていくという構造との関連性が見られること、彼らは対策を通して、高祖劉邦とのパーソナルな関係を擬制的に構築し、劉邦集団に取り込まれていったことが明らかとなった。

(2020年度)

2020年度は皇帝と劉邦集団との関係及び劉邦集団内部の構造が変化する転換点として、第5代皇帝文帝期に着目して、研究を進めた。まず、2020年7月18日(土)にオンラインで行われた、第3回漢唐史研究会において、「前漢官制秩序の形成と劉邦集団」と題する報告を行い、察挙の構造に劉邦集団内部の構造が大きく反映されていることを論じた。また、2020年11月7日(土)にオンラインで行われた、第75回東洋史学研究会において、「文帝期における劉邦集団の実態：服色改正との関係を中心として」と題する報告を行い、当該期に行われた服色改正の議論を通して、文帝期に劉邦集団が置かれた状況について論じた。その際、劉邦集団が服色改正の議論に反対していたこと、劉邦集団にとって服色改正が高祖劉邦のカリスマ性と関わる問題と認識されていたこと、さまざまな背景をもつ官僚を結集するために高祖劉邦のカリスマ性が利用されていたことを明らかとした。

さらに、『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』第88号に、「前漢文帝期における察挙の形成と劉邦集団」と題する論文を公刊した。これまで皇帝側の意図からしか考察されていなかった文帝期の察挙について、その議論・実施に劉邦集団が影響を与えたこと、劉邦集団にとっては自身の勢力を維持するために、関係のある人材を登用し、彼らのネットワークに取り込むことを目的としたことを論じた。

これら文帝期に生じた変化と当該期の状況が解明されたことにより、以降、どのように作用して人格的結合、さらには官僚機構、それに支えられた皇帝支配の構造に影響を与えたのか、さらに研究を展開する基礎を固めることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 福永 善隆	4. 巻 88
2. 論文標題 前漢文帝期における察挙の形成と劉邦集団	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集	6. 最初と最後の頁 43 - 56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 福永 善隆	4. 巻 86
2. 論文標題 漢初、劉邦集団の展開と構造	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集	6. 最初と最後の頁 169-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 福永 善隆	4. 巻 43
2. 論文標題 柴田 昇著『漢帝国成立前史－秦末反乱と楚漢戦争－』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 名古屋大学東洋史研究報告	6. 最初と最後の頁 119-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福永善隆	4. 巻 64・65
2. 論文標題 前漢前半期、劉邦集団における人格的結合の形成	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 鹿大史学	6. 最初と最後の頁 11 - 22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 福永善隆
2. 発表標題 文帝期における劉邦集團の実態：服色改正との関係を中心として
3. 学会等名 第75回東洋史学研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 福永善隆
2. 発表標題 前漢官制秩序の形成と劉邦集團
3. 学会等名 第3回漢唐史研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 福永善隆
2. 発表標題 前漢前半期における察挙の性格 劉邦集團の人格的結合形成の観点から
3. 学会等名 2019年度九州史学会大会東洋史部会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福永善隆
2. 発表標題 前漢前半期における劉邦集團と察挙
3. 学会等名 中国古代史像再構築のための基礎的研究班第2回研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 福永 善隆
2. 発表標題 前漢劉邦集團の人的結合と郎官
3. 学会等名 第64回東洋史学研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福永善隆
2. 発表標題 前漢前半期における劉邦集團と人事制度の展開
3. 学会等名 第64回鹿大史学会大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関